

愚考考古学

⑤

魏志倭人伝の「巴利国」について

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

前号「河内」の項で、ヤマタイ国論争のもととなった魏志倭人伝のことを少々述べたので、その中にある巴利国のことについて私見を述べたい。

倭人伝には、日本の国々が次のように記載されている。「初めて一海を渡ること千余里にして对馬国に至る。其の大官は卑狗ヒコグと云い、副は卑奴母離ヒヌモリと曰う。(省略)

又、一海を渡ること千余里、末盧国マツルに至る。(省略)
又、南して一海を渡ること千余里、名づけて瀚海ガンカイと曰う。一大国に至る。官は亦卑狗ヒコグと曰い、副は卑奴母離と曰う。(省略)

東南に陸行すること五百里、伊都国イトに到る。官は爾支ニギと曰い、副は泄護舩セチモク・柄渠舩ヒョウゴクと曰う。(省略)

東南して奴国に至ること百里。官は罌馬舩ヅマクと曰い、副は卑奴母離と曰う。

東行して不弥国フミに至ること百里。官は多模タモと曰い、副は卑奴母離と曰う。

南して投馬国イヅモに至るには、水行すること二十日。官は弥弥ミミと曰い、副は弥弥那利ミミナリと曰う。(省略)

南して邪馬壹ヤマト(邪馬臺)国に至る。女王の都する所なり。水行すること十日、陸行すること一月。官に伊支馬イギマ有り、次は弥馬升ミシヨウと曰い、次は弥馬獲支ミマワキと曰い、次は奴佳鞮ケツイと曰う。(省略)

次に斯馬国シマ有り、次に已百支国ヒヤクシ有り、次に伊邪国イヤ有り、次に都支国ツシ有り、次に弥奴国ミヌ有り、次に好古都国ココト有り、次に不呼国フコ有り、次に姐奴国シヌ有り、次に对蘇国タイソ有り、次に蘇奴国ソヌ有り、次に呼邑国コウイ有り、次に華奴蘇奴国カヌソ有り、次に鬼国キ有り、次に為吾国イゴ有り、次に鬼奴国キヌ有り、次に邪馬国ヤマ有り、次に躬臣国クダシ有り、次に巴利国ハリ有

り、次に支惟国^{ギミ}有り、次に烏奴国^{ウヌ}有り、次に奴国^ヌ有りて、此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国^{クヌ}有りて、男子を王と為す。其の官に狗古智卑^{クコチヒ}狗有り、女王に属せず。

以上に記載された国々について、現在まで学者等によつて、

対馬国は 長崎県対馬

一大国は 彦岐

末盧国は 佐賀県松浦郡

伊都国・斯馬国は 福岡県糸島郡

奴国は 福岡市

と比定地があてはめられており、当地の近辺では、

烏奴国が 大分県宇目町

と比定されている。

しかし、巴利国については、まだ比定地が推定されていない。そこで、私は、巴利国こそ大分県海部郡である」と比定したい。なぜならば、神話として海幸彦・山幸彦のことが伝えられており、海幸彦が素晴らしい釣針を持っていて、それを借りた山幸彦が紛失し、太刀で作って返したという由来があるからである。

昔から、地名等は個人が命令するのではなく、自然の形態や特徴をとらえて、自然に呼称したものが多い。そこで、巴利国は「ハリ」を作った国を、誰言うもなく、「ハリ国」と呼んだのではなからうか。

この海部は、今でも漁業で成り立っているように、古代から人は海に生き、産物を求め、進んだ漁業技術を開発していったと推測される。

私は、現代的な金属性の「ツルハリ」を最初に作ったのは、海に生きる海部の人と考えている。

当時、金属性のハリは大きな発明であり、それが全国に知られて、自然とハリの国と呼ばれたと思う。そして、これらのことを裏付けるかのように、この周辺には「ツル」等、漁業に関係のありそうな地名が多い。

ツルミ 鶴見

ツルミ 鶴望

ツル 津留（中津留・広津留）

ツルサキ 鶴崎

ツルミサキ 鶴御崎

又、漁業に関係のありそうな地名を地図で探すと、ツルと同じようにツクもある。

ツクミ 津久見

それでは臼杵はと考えると、沖縄では潮のことをウスと呼んでおり、潮の来るところ、ウスキかもしれない。臼杵は潮だまりか。

昭和六十三年のNHKの新ラジオ歌謡の中で「ちぬの歌」というのをボニージャックスが歌っている。

この「ちぬ」の語源は、現在の神戸の近くの地名「ちぬ」のことで、チヌが捕れたことから、この地方が「ちぬ」と呼ばれるようになったといわれている。

このようなことを参考に、この近辺の地名を見てみると、

津久見に千怒（ちぬ）

鶴見町に鮪浦（しびうら）・小鯛網代（こだいあじろ）

太刀ヶ浦（たちがうら）

臼杵・津久見・米水津に黒島等がある。

魚名が先か、地名が先かは分からない。話は巴利国から脱線したが、倭人伝にも当時の国々の支配者等の官名が

卑狗（彦）・卑奴母離（ヒヌモリ）

と記載されており、私は、卑奴母離は卑奴と母離では

ないかと思っている。それは、日本の古い物語に彦・姫が出てくるからである。

「奴」の字はナ・ヌと呼ばれているが、烏奴がウメであれば、奴はメとも読める。そうすれば、

卑奴（姫）・母離（守）である。

このようなことから、巴利国に彦・姫・守がいたことになり、海幸彦もその一人ではなからうか。

それらに因んだ地名として、佐伯地方に

彦島・彦岳・姫岳・守後・護江・官島

の地名が残っている。彦岳は山幸彦かもしれない。

以上のようなことを合せ想像していると、どうしても、この海部郡が海幸彦・山幸彦の神話の発祥の国、巴利国のように思われる。このような想像にひたっているのは、私だけかもしれないが、可能性はあると信じている。

それから、先日、青山の奥に製鉄所跡が発見されたというので現地に行ってみたが、四囲の状況からして製鉄所跡とは考えられなかったが、ハリ等を作った鍛冶跡なら説明はつくと思えた。